The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	白居易「三教論衡」について
Author(s)	堀, 史人
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2011, 45, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/25126
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

白居易「三教論衡」について

堀　史人

キーワード：白居易、三教、『孝経』解釈、諷諭

はじめに

白居易の「三教論衡」（『白氏文集』巻五九）という文章は、大和元年の文宗の誕生日に皇帝の御前で行われた、儒仏道三教の代表者による討論の記録である。この討論に、白居易は儒教代表として出席した。

「三教論衡」は、「序」・問答・「退」で構成され、三教の代表者による問答がこの文章の中心である。開会の挨拶としての「序」の前には、さらに白居易が自らの文集に収めるにあたって付した自序が置かれている。

この「三教論衡」について、朱金城氏は、登場から退場までの場面を記録するという形式に注目し、一種の戯劇の台本として位置づけている。[1] しかし、単なる台本であれば、白居易は自序まで付して自編の『白氏長慶集』に収めたであろうか。また、「三教論衡」に見える経書解釈には白居易独自の部分もあるように思われる。本稿では、「三教論衡」の具体的な表現に則して、白居易の経書解釈や「三教論衡」執筆の意図を検討する。

一、台本としての「三教論衡」

「三教論衡」では、僧侶から儒者、儒者から僧侶、儒者から道士、道士から儒者の順で質問が行われ、それぞれの質問は「問」と「難」の二段構えとなっている。このうち、最後に行われる道士から儒者白居易への質問とその答えを見てみよう。

法師所問、「『孝經』云、「敬一人則千萬人悦」。其義如何者」。

法師の問う所、「『孝経』に「一人を敬すれば則ち千万人悦(よろこ)ぶ」と云う。其の義は如何なる者ぞ」と。

道士の「問」に対し、白居易は次のように答える。

謹按『孝經』「廣要道章」云、「敬者禮之本也。敬其君則臣悦、敬一人則千萬人悦。所敬者寡、而悦者衆。此之謂要道也」。

謹んで按ずるに『孝経』「広要道章」に云う、「敬とは、礼の本なり。其の君を敬すれば則ち臣悦び、一人を敬すれば則ち千万人悦ぶ。敬する所の者は寡(すくな)く、悦ぶ者は衆(おお)し。此れをこれ要道と謂うなり」と。

白居易の『孝経』「広要道章」の引用に続いて、道士はさらに「難」を発する。

法師所難云、「凡敬一人則合一人悦、敬二人則合二人悦。何故敬一人而千萬人悦」。又問、「所悦者何義、所敬

者何人者」。

法師の難ずる所に云う、「凡そ一人を敬すれば則ち合に一人悦ぶべし。二人を敬すれば則ち合に二人悦ぶべし。何の故にか一人を敬して千万人悦ぶや」と。又た問う、「悦ぶ所の者は何の義ぞ。敬う所の者は何れの人なるか」と。

道士の「なぜ一人を敬して千万人もの人が悦ぶことになるのか」という追及に対し、白居易は次のように答える。

『孝經』所云「一人」者、謂帝王也。

『孝経』に云う所の「一人」とは、帝王を謂うなり。

白居易は『孝経』「広要道章」の一節について、「一人」は「帝王」すなわち皇帝であると説明してみせた。このように「三教論衡」は、表面的には経書の文言に基づく問答が展開されているが、討論の行われた場面が文宗の誕生日であったことを考えると、単なる経書解釈の議論に留まらぬ意味を持ちうるであろう。すなわち、白居易は最後に「一人」を皇帝であると説明することによって、三教が皇帝のもとに帰一するという、文宗の誕生日を祝うにふさわしいにぎにぎしい結論へと導いたのである。白居易「三教論衡」は、たしかに朱金城氏の解釈のように、祝賀行事の台本としての性格を持っていることを内容面からも確認することができる。

二、白居易の経典解釈

（一）伝統的な『孝経』「広要道章」の解釈

ここで、白居易が述べた『孝経』の解釈に注目してみたい。白居易が取り上げた「広要道章」の一節を、『十三経注疏』所収『孝経注疏』で確認してみよう。［　］書きの部分は、唐の玄宗による御注である。

禮者敬而已矣［敬者、禮之本也］。故敬其父則子悦、敬其兄則弟悦、敬其君則臣悦、敬一人而千萬人悦［居上敬下、盡得懽心、故曰悦也］。

礼とは、敬なるのみ［敬とは、礼の本なり］。故に其の父を敬すれば則ち子悦び、其の兄を敬すれば則ち弟悦び、其の君を敬すれば則ち臣悦び、一人を敬すれば千万人悦ぶ［上に居りて下を敬すれば、尽く懽心を得。故に悦ぶと曰うなり］。

白居易が「三教論衡」に引いた「敬とは、礼の本なり」という一文は、『孝経』の本文ではなく、唐の玄宗の御注であった。そして、「上に居りて下を敬すれば、尽く懽心を得。故に悦ぶと曰うなり」とあるように、玄宗の御注に基づけば、「敬」の主体は上位者であり、敬意の対象である「一人」とは下位にいる者の一人で、特定の誰かに限定するものではない、ということになる。

さらに宋代になると邢昺が『孝経』に疏を付しているが、彼の解釈も御注を敷衍するものである。

天子敬人之父、則其子皆悦、敬人之兄、則其弟皆悦、敬人之君、則其臣皆悦、此皆敬父兄及君一人、則其子弟及臣千萬人皆悦、故其所敬者寡、而悦者衆。

天子、人の父を敬すれば則ち其の子皆悦び、人の兄を敬すれば則ち其の弟皆悦び、人の君を敬すれば則ち其の臣皆悦ぶ。此れ皆父・兄及び君一人を敬すれば則ち其の子・弟及び臣千万人皆悦ぶ。故に其の敬する所の者は寡く、悦ぶ者は衆し。

また、玄宗の御注が付される前の『古文孝経』孔安国の伝でも、「一人」は特定の一人に限定されない。

一人者、各謂其父兄君。千萬人者、羣子弟及臣也。

一人とは、おのおの其の父・兄・君を謂う。千万人は、群子・弟及び臣なり。(2)

以上のように、伝統的な『孝経』解釈においては、「一人」とは「父・兄・君」のうちの一人であり、特定の一人に限定されるものではなかった。そして、「敬」とは上から下への敬意として理解されてきたのである。

ところが、「三教論衡」で白居易が述べた答えは、伝統的な『孝経』解釈とは異なるものであった。先に引いた「『孝経』に云う所の「一人」とは、帝王を謂うなり」という一文に続いて、彼は次のように述べる。

王者無二、故曰一人。非謂臣下衆庶中之一人也。若臣下、敬一人則一人悦、敬二人則二人悦。若敬君上、雖一人即千萬人悦。

王者は二と無く、故に一人と曰う。臣下衆庶の中の一人を謂うに非ざるなり。若し臣下なれば、一人を敬すれば則ち一人悦び、二人を敬すれば則ち二人悦ぶ。若し君上を敬すれば、一人と雖も即ち千万人悦ぶ。

白居易は「一人」を「帝王」すなわち皇帝に限定し、「敬」とは皇帝に対する敬意、下から上へのベクトルを持つものだと説明して見せたのである。このような解釈は『十三経注疏』へと流れていく伝統的な『孝経』解釈の中には一切無い。では、この「一人」を帝王とする見方は、白居易独自の解釈なのだろうか。

(二) 伝統と異なる解釈の流れ

『孝経』には、白居易が「三教論衡」の中で取り上げた「広要道章」のほかにも、「一人」という表現を用いているところが二か所ある。

一つ目は、「天子章」である。ここには「「甫刑」云、「一人有慶、兆民頼之」(「甫刑」に云う、「一人慶有らば、兆民これに頼る」)」とあり、玄宗は「一人、天子也(一人とは、天子なり)」という御注を付している。この一節は、玄宗御注に「「甫刑」は、即ち『尚書』「呂刑」なり」とあるように、『尚書』の「周書・呂刑」篇の「一人有慶、兆民頼之、其寧惟永(一人に慶有らば、兆民これに頼り、其の寧きこと惟れ永からん)」[3]という一節から一部を引用したものである。

もう一つは、『孝経』「卿大夫章」である。ここでは『詩経』を引いて、「『詩』云、「夙夜匪懈、以事一人」(『詩』に云う、「夙夜懈らず、以て一人に事う」)」と言っている。この部分に対する玄宗の御注は、「卿大夫能早夜不惰、

敬事其君也（卿大夫、能く早夜に惰（おこた）らず、其の君に敬事するなり）」とあり、ここでもやはり「一人」は「敬事」の対象としての「君」と解釈されていることが分かる。

このように、『孝経』のなかには、「一人」という語で帝王を指す例が存在する。また、「天子章」が引く「一人慶有らば、兆民これに頼る」という『尚書』の文言は、「一人」を「兆民」という大きな数と対比させているという点で、『孝経』「広要道章」の「一人を敬すれば則ち千万人悦ぶ」という表現に類似している。そうすると、「広要道章」においてもこれらの解釈と同様に「一人」を帝王とする見方が潜在的にはあった可能性がある。

現に、元代の『孝経直解』に、「広要道章」における「一人」を「天子」に限定する、白居易と同じ解釈を見つけることができる。『孝経直解』は、元末に貫雲石が著した絵入りの『孝経』口語訳本である。「広要道章」の一節について、貫雲石は次の［　］のように説明している。

故敬其父則子悦、敬其兄則弟悦、敬其君則臣悦、敬一人而千萬人悦［這般敬重他父呵、孩兒懽喜。敬重他哥哥呵、兄弟懽喜。敬重他在上人呵、已下懽喜。敬重天子呵、天下人都懽喜］。

故に其の父を敬すれば則ち子悦び、其の兄を敬すれば則ち弟悦び、其の君を敬すれば則ち臣悦び、一人を敬すれば千万人悦ぶ［このように父を敬すれば息子が喜ぶ。兄を敬すれば弟が喜ぶ。その上にいる人を敬すればその下にいる人が喜ぶ。天子を敬すれば、天下の人はみな喜ぶ］。(4)

右では、貫雲石が「一人」を「天子」と解釈していることは明らかである。こうしてみると、白居易が「三教論衡」の中で説明してみせた「一人」とは「帝王」であるという解釈は、必ずしも特異なものとは言えない。『孝経』

「広要道章」における「一人」について、伝統的な解釈とは別に、白居易や貫雲石のように解釈する流れが存在したことが想像できる。白居易は、そのような伝統とは異なる解釈に依って「三教論衡」の論を展開したのではないだろうか。

三、白居易「三教論衡」の意図

（一）『左伝』の引用

最後に、白居易が「三教論衡」を自編文集に収めた意味を考えてみたい。『孝経』「広要道章」の「一人」をめぐる白居易の発言を、注意深く読んでみよう。

白居易は、「一人」とは「帝王」であると述べたのち、「何以明之（何を以てかこれを明らかにせん）」と言い、その理由を説明しようとする。「一人」を帝王とする解釈が『尚書』や『孝経』のほかの部分に見えることは、既に確認した。ここでもそれらを引用すれば説明できるはずであるが、白居易はそうしなかった。

設如有人盡忠於國、盡敬於君、天下見之、何人不悦。豈止千萬人乎。設如有人不忠於國、不敬於君、天下見之、何人不怒。亦豈止千萬人乎。

もし人の忠を国に尽くし、敬を君に尽くすもの有らば、天下これを見て、何人か悦ばざらん。豈に止（ただ）に千万人のみならんや。もし人の国に不忠にして、君に不敬なるもの有らば、天下これを見て、何人か怒らざらん。亦た豈に止に千万人のみならんや。

ここに描かれている国家は、「君」「人」「天下」、すなわち皇帝・臣下・民の三者によって構成されている。そのなかで、ある臣下が皇帝を敬していればそれを見て天下万民は悦び、逆に不敬であれば天下万民は怒るのだ、と白居易は述べる。ここでは、臣下から皇帝への「敬」と、民の「悦」とは相関関係にあることが分かる。

そして、「敬」とは臣下から皇帝への敬意である以上、敬意の対象である皇帝は「敬」を受けるだけの資格がなくてはならない。つまり、皇帝が正しい状態にあれば、臣下から「敬」を受けることができ、そのようすを見て民は「悦」びを得ることができる。逆に、もし臣下が「不敬」であり、民が「怒」っていることがあれば、それは皇帝が正しい状態にないことを示している。ここに示されているのは、臣下と民が支持してはじめて存在できる皇帝の姿である。

続いて白居易は焦点を「敬」から「礼」へと移し、やはり「礼」が正しく行われていれば民は上位者を積極的に支持するのだ、と説明する。これは、『春秋左氏伝』僖公十一年の伝に、「禮、國之幹也。敬、禮之輿也。不敬則禮不行、禮不行則上下昏（礼は国の幹なり。敬は礼の輿なり。敬せざれば則ち礼行われず、礼行われざれば則ち上下昏し）」とあるように、「敬」は「礼」と同様の概念として認識されていたことに基づくものである。

然敬即禮也、禮即敬也。故『傳』云、「見有禮於其君者、事之如孝子之養父母也。」如此則豈獨空悦乎。亦將事而養之也。「見無禮於其君者、誅之如鷹鸇之逐鳥雀也。」如此則豈獨空不悦乎。亦將逐而誅之也。

しかれば、敬は即ち礼なり、礼は即ち敬なり。故に『伝』に云う、「其の君に礼有る者を見れば、これに事うること孝子の父母を養うが如くせよ」と。此くの如くすれば則ち豈に独り空しく悦ばんや。亦た将に事えてこれを養わんとするなり。「其の君に礼無き者を見れば、これを誅すること鷹鸇（ようせん）の鳥雀を逐（お）うが如くせよ」

と。此くの如くすれば則ち豈に独り空しく悦ばざらんや。亦た将に逐いてこれを誅せんとするなり。

ここに引用されている『伝』のことばは、『春秋左氏伝』文公十八年に見えるものである。莒の紀公には僕という太子がいたが、季佗という子を愛して太子僕をしりぞけ、その上、国に「無礼」な行いが多くあったため、太子僕は君主の紀公を弑殺し、魯に亡命した。魯の宣公は太子僕に邑を与えようとしたが、大夫の季文子は反対して太子僕を国外退去に処した。そのとき、季文子は以前の大夫から教えられたことばとして「其の君に礼有る者を見れば、これに事うること孝子の父母を養うが如くせよ。其の君に礼無き者を見れば、これを誅すること鷹鸇の鳥雀を逐うが如くせよ」の文句を引き、太子僕は君主への礼を失した者だから追い出すのだ、と理由を説明している。このような物騒な事件を背景にもつ言葉を、白居易はなぜ文宗の誕生日を祝う席で持ち出したのだろうか。

実は、「三教論衡」の行われた大和元年の降誕日は文宗即位後最初の聖節であり、前年には先代の敬宗が「褊急」（こせこせしたさま）で力士を「配流」（流罪）・「籍没」（家財没収）したり、宦官を「捶撻」（鞭打ち）するなどして「怨」みかつ「懼」れられていたため、宦官らに弑殺されるという事件が起こっている（『資治通鑑』巻二四三）。『左伝』においても、君主が国に多くの「無礼」を行ったために臣下に「其の君に礼無き」者が現れた、という背景があった。白居易が『左伝』を引用したのは、文宗即位前の大逆事件を意識してのことであろう。白居易が言祝ぎにはふさわしくないことばをあえて盛り込んだのは、文宗に対し、皇帝が正しい状態に無ければ国家全体が混乱する、という警句を投げかけるためであり、皇帝は国家の中心であるという自覚を持ち、身を正して臣下衆庶に目を向けてほしい、という願いがあったためであろう。

（二）新楽府「驃国楽」

このような白居易の国家観は、白居易五十六歳時の「三教論衡」において初めて発露したものではなかった。同様の考えは、彼が三十八歳の時に作った新楽府、とりわけ「驃国楽」（巻三）のなかに顕著に見いだすことができる。

「驃国楽」とは、驃国という外国の音楽である。新楽府の序文には「欲王化之先邇後遠也（王化の邇（ちか）きを先にし遠きを後にするを欲するなり）」とあり、遠くよりも近くの民に目を向けてほしいという願いが込められている。

「驃国楽」の前半には、皇帝と臣下のようすが描かれている。驃国から献上された音楽に皇帝は自ら耳を傾け、驃国は臣従を願い出る。

驃國樂　驃國樂　　驃国の楽　驃国の楽
出自大海西南角　　大海の西南の角より出づ
雍羌之子舒難陁　　雍羌の子の舒難陁
來獻南音奉正朔　　来たりて南音を献じて正朔を奉ず

先ほどの「三教論衡」の図式に依れば、ここでは皇帝たる徳宗に対し、臣下たる驃国の者は音楽という形で皇帝を「敬」しているのである。

前半部では、このあと驃国の音楽が実際に上演され、百官が驃国の臣従を讃美するさまが描かれるが、後半に入ると、「驃国楽」はがらりと雰囲気を変える。以下は、ある老農夫が皇帝や臣下のようすを見て、独りごちるよう

すである。

時有擊壤老農父
暗測君心閑獨語
聞君政化甚聖明
欲感人心致太平
感人在近不在遠
太平由實非由聲
觀身理國國可濟
君如心兮民如體
體生疾苦心憯悽
民得和平君愷悌
貞元之民若未安
驃樂雖聞君不歡
貞元之民苟無病
驃樂不來君亦聖
驃樂驃樂徒喧喧

時に擊壤する老農父有り
暗に君の心を測りて 閑(いたず)らに独語す
聞く 君の政化は甚だ聖明にして
人心を感ぜしめ太平を致さんと欲すと
人を感ぜしむるは近きに在る 遠きに在らず
太平は実に由る 声に由るに非ず
身を観て国を 理(おさむ)れば 国 済(すく)うべし
君は心の如く民は体の如し
体に疾苦を生ずれば 心 憯悽たり
民 和平を得れば 君 愷悌たり
貞元の民 若し未だ安からずんば
驃楽 聞くと雖も 君は歓ばず
貞元の民 苟(も)し病無くんば
驃楽 来たらざれども 君は亦た聖なり
驃楽 驃楽 徒(いたず)らに喧喧たり

不如聞此芻蕘言　　此の芻蕘（すうじょう）の言を聞くに如かず

皇帝は心、民は体であって、心と体の健康状態がリンクしているように、皇帝と民の状態も相関関係にある。そのため、皇帝が正しい状態になければ、民も「和平を得る」ことはできない。老農夫が嘆きを発しているのは、体たる民が「安からざる」状態にあるのにもかかわらず、心たる皇帝が音楽を耳にして「歓」ぶ、というありさまだからである。

やはりここでも白居易が意識しているのは、皇帝を頂点とし、その下に臣下、さらに民が存在するという国家構造である。「驃国楽」の後半では皇帝と民とが心と体にたとえられてクローズアップされるが、ここで重要なのは、皇帝の状態と民の状態とは相関関係にあるという点である。皇帝が正しい状態にあり、天下万民が太平を謳歌するためには、「此の芻蕘（庶民）の言を聞くに如かず」、皇帝は自国の民の声に耳を傾け、身を正さねばならない。これが新楽府「驃国楽」の趣旨である。

そして、「驃国楽」における「君」と「民」との関係は、とりもなおさず「三教論衡」における「君」と「天下」の関係に等しい。新楽府に込められた諷諭の意識は、「三教論衡」のなかにも現れていたのであった。

おわりに

白居易「三教論衡」に見える、『孝経』「広要道章」の「一人」を「帝王」に限定する解釈は、伝統的な解釈には見られない。これは、伝統とは異なる流れの中に存在したものであったと考えられる。

白居易があえて伝統と異なる解釈をとって「一人」を「帝王」であると説明したのは、単に祝賀行事にふさわしいおめでたい結論をもたらすためだけでなく、臣下と民があってこそ皇帝は存在できるという彼の国家観を展開するためであった。「三教論衡」は、新楽府同様に自身の国家観をもとにした諷諭のメッセージが込められた文章だからこそ、彼は自序を付して自編文集に収め、後世に伝えようとしたのである。

注　本稿に引用した白居易の詩文と巻数は、『白氏文集』（『四部叢刊初編』集部）によった。

（1）朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）三六八二～三六八三頁

（2）『古文孝經』足利本「広要道章第十五」（足利學校遺蹟圖書館、一九三一年）

（3）『十三經注疏』所収『尚書正義』「周書・呂刑」

（4）太田辰夫・佐藤晴彦 編『故 林秀一氏舊藏 元版孝經直解』（汲古書院、一九九六年）、三八～三九頁

（大学院博士後期課程学生）

要旨

關於白居易的〈三教論衡〉

堀　　史　人

白居易的〈三教論衡〉是在皇帝生日所舉行的儒・佛・道三教代表者的討論的記錄。白居易的這一作品歷來被認為是一種戲劇的腳本。

在這一文章中，白居易將《孝經》〈廣要道章〉的“敬一人則千萬人悅”句中的“一人”解釋為“帝王”。這一詮釋在匯總於《十三經註疏》的傳統的《孝經》解釋中是不存在的。可是，通過元代《孝經直解》的與白居易相同的解釋的事實，與傳統相異的《孝經》解釋的存在是有可能的。白居易就是依據這一相異的解釋而展開了〈三教論衡〉的論述吧。

此外，〈三教論衡〉中反映了白居易的國家觀念。白居易在新樂府〈驃國樂〉中敘述了皇帝與庶民的狀態在於其相關關係中，並對皇帝的應有姿態進行了諷喻。於此相同的意識同樣表現在他的〈三教論衡〉中。〈三教論衡〉並不是單純的腳本，正因為其包含了白居易在新樂府中的對皇帝的諷喻的意象，所以它才被白居易附之自序收錄到自編文集中。